



離脱と回帰と

昭和文学の時空間

江藤淳





離脱と回帰と
昭和文学の時空間
江藤淳



日本文芸社

© 1989 Jun Eto
Printed in Japan



江藤淳
離脱と回帰と

昭和文学の時空間

*

1989年5月25日第一刷印刷

1989年5月30日第一刷発行

発行者 兵頭武郎

発行所 株式会社 日本文芸社 〒101 東京都千代田区神田神保町 1-8

電話 東京(03)294-8931 振替 東京 8-73081

本文印刷所 図書印刷

カバー・表紙・扉印刷所 栗田印刷

製本所 大口製本

定価 1300 円(本体1262円)

ISBN 4-537-04985-5 C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

離脱と回帰と 目次

I 昭和天皇と文学空間

7

日本文学の源泉 聖なる空間と俗なる空間 フェリックス・ガタリ、あるいは死と再生
三島文学と詩の欠如 大正のシニシズム 世俗天皇制と日本の近代化 離脱と転向をめぐる
フォニーとリアル 中野重治の再発見 平野謙と中野重治、あるいは二つの「肉眼」
対照的な二人 悲劇的な人間関係 『甲乙丙丁』とトボスの喪失 モダニズムと転向
堀辰雄的フォニーの再生産 父性の欠如と和歌の世界 逃れられない問題

II 近代とポスト・モダン

95

大江健三郎と開高健の登場 通時的な尺度で捉えきれない時代 漱石と秋声をめぐる
内部告発していた三島由紀夫 トボスのある小説 思想としての『近代の超克』
顕在化した文学的断層 小説でない文学世界の模索 相撲と文学

III 六十年の荒廃

123

家を建てるということ 占領下言語空間の虚妄 第一次戦後派と第三の新人の認識
平野謙という名の象徴 武田泰淳と小島信夫をめぐる 戦後の疲弊は六十年続く
インタヴェューを終えて

183

あとがき

187

裝 幀 菊 地 信 義

離脱と回帰と 昭和文学の時空間

——
インタビューアー
富岡幸一郎

I
昭和天皇と文学空間

——今年一月七日に天皇が崩御されて、六十三年に及ぶ昭和という時代に幕が下りたわけです。大行天皇は在位六十二年、大正十年から摂政になられているので、およそ七十年に及ぶ長い時間が在位された。

昨年九月のご不例以来、日本人はあらためて天皇という存在について、否応なく考えさせられ、戦前・戦後を生きた人はもとより、戦後生まれの若い人も含めて、天皇という存在について批判的な人も無関心であった人も、何らかの形である感慨を持ったと思います。

そして昭和が終わり、平成という元号になった。しかし虚子の句の「貫く棒のごときもの」ではないですが、問題を遺した形で新しい時代を迎えた。いや、ほんとうに新しい時代になったのか、何が終わり何が新たに始まったのか、そのへんのところも実ははっきりとはしない。ただ、いずれにしてもひとつあきらかなのは、昭和なり、近代なり、戦後という問題を、今の時期に総合的に考え直すべきときに来ているのではないか、ということです。

江藤さんが「諸君」三月号に書かれた『遺された欺瞞』というエッセーでは、昭和は終わったけれども戦後は終わったのか、という問いかけがある。まさに、遺された問題についての問いかけだと思いますが、最初に、昭和天皇が崩御されて昭和が終わったということへの江藤

さんの感慨をまず伺って、それから、具体的な問題に入って行きたい。

江藤 崩御の朝は、新年会を予定していた日の朝でした。これには富岡さんもお招きしていましたが、もう二十年ぐらい前から、私の家で毎年新年会をやっていて、六、七十人ぐらい集まるのが例なのです。今年は陛下がご不例で、いつ何が起るかわからないから、ずいぶんはらはらしながら様子を見ていたのですけれども、幸い昭和六十四年になった。まあ、もうしばらくはお保ちになるだろうから、できれば昭和のうちにやりたいと思ってね。いつもはだいたい一月の成人の日ぐらいまで鎌倉が混むものですから、その直後あたりにやっていたのですけれども、今年は一週間ほど繰り上げて、七日の土曜日にすることにしていました。

そうしたら、六日の晩にある人から電話があって、非常にご病状がよくないと言う。しかし、明日はたぶん大丈夫で、明後日が危ないのじゃないか。ということは、八日が警戒を要するということですね。いよいよ昭和は終わりがかけているかなという感じがしたのですが、たぶん七日は大丈夫だろうと思うことにして、そのまま眠ってしまったのです。

そうしたら、七日朝午前六時過ぎご危篤の報道があるちょっと前頃だったかな、ある人から電話がかかってきて、非常にご重篤であるという。ああ、やっぱり、と思いましたが、すると、それから十分後にテレビ局から電話がかかってきて、崩御の公表があるのも時間の問題だ、その場合には局に来てくれるか、というので、公表があるかないか、それまで待ちましょうというようにして、とにかく衣服をあらためてテレビを見ていたんです。

一方、いずれにしてもこれは大変な日になりそうなので、お招きしていた方々に、今日は新年会をやらないうことを伝えなければいけない。幸い連絡係をやってくれている友人がいるものですから、その人に連絡して、皆さんに知らせていただくという手配をしているうちに、崩御の公表があり、間もなくテレビ局に連れて行かれたので、平成という新しい元号が官房長官から公表されたときには、テレビ局のスタジオのモニターテレビで見えていたんです。

——ちょうど、その局のテレビを見ていました。

江藤 ああ、そうですか。あの平成という元号はちょっと意外だったですね。ただし、大正が昭和に変わったときは瞬間的に変わったんですが、この日一日は昭和だということで、改元の公表があったのが午後三時前ぐらいでしたか、二時にあるという話だったのですけれども、少し遅れて二時四十分頃だったかな。いずれにせよまだ平成ではなくて昭和だということで、家に戻ってきて、家内と昭和の最後の日を過したんですけれどもね。

テレビを見ていたら、若い人が、急に年とったような気がするって言っていましたが、元号が変わったためでしょうね。私も昭和一桁ですから、生まれて以来昭和以外の年号を知らないわけで、初めて昭和から平成という二つの時代に自分の人生が相渉ったのだな、という感じはありましたね。

それにつけても、昭和天皇は摂政時代から数えれば、七十年近く日本に君臨しておられたのですから、われわれはものを考えたり書いたり話したりするときに、空気の内存在をいつも前提

にしているように、昭和天皇の存在をいつも前提にしていたなということに、突然気がついた。ところがひとたび崩御ということになると、新聞社や雑誌社に原稿を求められて、書こうと思っても、前提がにわかにならなくなったので、いつものようには書けないんですね。やはり、日本人の時空間も、言語そのものの作用も、一変してしまったという感じがする。

だから確かに整理して考えると、昭和は終わったが戦後は終わってないと言えるのですが、この昭和や戦後に対するわれわれの側の対し方に問題が残っている。対し方の立脚点が崩れてしまったというか、一変してしまった。崩れただけじゃないでしょうが、初めはまず崩れたと感じられた。

こういう感覚は、おそらくアメリカ人にはないだろうなと思いますね。フランス人にもたぶんないのじゃないか。イギリス人には多少あるかもしれないけれども、やはり違うのじゃないか。イギリスの王室と日本の皇室はよく似ていると言われますけれども、随分違うとも言える。やっぱり違うのじゃないかという気がするのですね。

そうすると、これは実は日本文学そのものの根源に立ち返って問題になる種類のことなのかも知れない。つまり人麻呂の歌、家持の歌、『源氏物語』等々、敬語の問題一つを考えてみるも、日本文学の源泉には天皇というものがあつた。だからこそ、文学をもって自分の仕事と考えている人間が崩御によって戸惑うというか、足元が崩れたような感じを持つのではないか。

もっともそう言っていて、何にも書けなくなっちゃったら、こっちは飯の食い上げですから

ね。飯の食い上げだけじゃない、自分のいちばん大事な精神活動が停止してしまったら困るので、自問自答しながら、今日まで這い上がってきたような次第です。

聖なる空間と俗なる空間

——崩御の日ですが、私は実は、お昼頃に知ったんです。それでテレビを見ましたら、江藤さんとか林健太郎さんとかが出ていた。そのうちに平成という新元号が決まった。発表が予定より遅れたというのも妙なタイミングでしたが、その後、何とはなしにですけれど、皇居のほうに行ってみたんですね。記帳をしようという積極的な意思ではなくて、まあ、漠然と何かを見に行きたかった。

江藤　　そうでしょうね。

——家にも腰が定まらないような感じで、夕方、二重橋前に行っただけです。そこで感じたのは、記帳に来ている人々の静かな感じ、肅々と来て、整然と記帳しているその静けさなんです。

民衆とか、大衆とか、人民とかという言葉がありますが、日本の大衆・民衆というものの一つの姿を見る思いがした。もちろん自分もその中に入っているわけですが、客観的に見たときに、非常に静かな、静謐な感じですね。これは私の中では経験したことがないことでした。

大衆とか民衆という言葉はもちろん政治や文学の領域でも使いますが、そのありのままの正直な姿を実際に目のあたりにするといいですか、あの日、あの時間に、そういう空間があそこにあった、ということ。何よりもそこにある感動を受けたのは確かなんです。

江藤 そうでしょうね。日本人がそのときそういう姿になり始めたというか、かつてはたしかにそういう面があったんですね。戦後はほんとうに、そういう時空間を経験する機会が激減した。ほとんど皆無になってしまったといってもいい。いつもどこかで世俗的な音がして、世俗的な文脈の中だけを人が行き来している。しかし、よく考えてみると、聖なる空間を欠いた世俗的でしかない空間というものは、これは実は、人間的な空間じゃないんですね。人間の住んでいる空間は世俗的空間だけで出来上がっているはずがない。必ず毎日人は死んでいく。死んで行く人間の野辺送りを毎日やっているのですから、人間の住んでいる空間は、人間の目に完全に透視できない空間をその中に恒つねに含んでいるのですね。そういう聖なる空間を含んだ空間が、初めて人間の住み得る空間だということになる。宗教が違ったり、習俗が違ったりするにつれて、その聖なる空間と俗なる空間を行ったり来たりする方式が少し違わなければならない、人間にとってこの二つの空間が不可欠だということ自体は変わらないと思うのですね。

これに対して、戦後日本の空間は、一般に戦後民主主義というふうに言われていますが、いわゆる象徴天皇制まで含めて、一切合財を世俗的空間の中に押し込めてしまった。その世俗的空間というのは、いつも猥雑な音が鳴り響いている空間で、それをいちばん漫画的に集約した